

# 都市型小住宅の開口部の採り方についての研究 —敷地面積100㎡未満の独立専用住宅を通して—

1117 小堤公伯

指導教員 教授 高宮眞介、助手 佐藤慎也

## 1. はじめに

バブル崩壊後の地価、建築費の下落等による住宅価格の低下化や土地利用転換などを背景としたマンションの大量供給に伴う人口の都心回帰という現象が近年顕在化してきている。こうした状況の中で、一つの現象として見られるのが、都市における「小住宅」や「狭小住宅」である。これらは建築雑誌を中心とするメディア上でクローズアップされる傾向にある。現代において建築家が小住宅を設計をする際に、時代背景の違いからくるライフスタイルの変化や敷地環境の変化などに加えて、建築家自身の「小さい」ということに対する認識や感じ方の変化から、様々な試みが都市に展開されている。

## 2. 研究目的

住宅というビルディングタイプはプログラム上ほとんど違いが無い。(主なプログラムは、リビング、ダイニング、キッチン、バス、トイレ、ベッドルーム。)しかし、住宅の形態は様々である。形態の違いを引き起こしている要因は用途地域による法の制限、敷地条件、施主の要望の違いによる場合、建築家が意図的に変化させている場合、構造から決まっている場合などが考えられる。形態の違いを引き起こしている要因は、開口部の採り方にも大きな影響を与えている。外部空間と内部空間の間に配置されている開口部は、内部空間とも外部空間とも解釈出来る。その目的は、気持ちのいい光を取り込むこと、内部空間に広がりを与えること、外部空間の風景を切り取るなど開口部の機能は様々である。そこで、都市型小住宅においての外的要因(敷地面積、隣地との関係、法的制限など)の厳しい条件の住宅では、開口部が重要な役割を持っていると考えられる。本研究では開口部の機能、特に「光を取り込む」という機能に焦点をあて、その手法の一端を明らかにし、開口部の重要性、住空間の豊かさを認識したいと考えている。

## 3. 研究(調査)方法

### 3-1. 調査対象

便宜的に現代の建築ジャーナリズムの中で代表格と考えられる「新建築 住宅特集」に掲載されている専用住宅を扱う。

3-1-1. 都心の定住人口が増加に転じた1997年から現在もなお増加中である2004年に至るまでに掲載された専用住宅から特に敷地面積100㎡未満の専用住宅。

3-1-2. 接道部分が1カ所のみ敷地。

この2点の条件を満たす住宅作品について文献をもとに調査、分析を行う。

### 3-2. 分析方法

3-2-1. 道路に面している部分の方角はどの方角になっているのかを検証する。

3-2-2. 外部にヴォイドを持つものと持たないものを検証する。

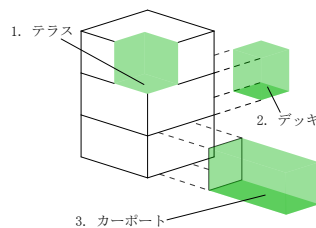
3-2-3. 前面道路に対してどのように開口部を設けているのかを検証する。  
敷地境界線と壁面の形状  
前面道路に対する開口部の構成  
(1面のみを検証)

3-2-4. 外部ヴォイドの有/無と前面道路に対する開口部の関係を検証する。

### 3-3. 外部ヴォイドの定義

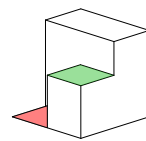
「建物ヴォリュームからかき取られるような形で分節された小さな外部空間。または、建物ヴォリュームに食い込むような形で組み込まれている小さな外部空間」と定義する。  
用途としては、主に「中庭」「坪庭」「テラス」「ベランダ」「駐車場」である。

#### 外部ヴォイドをもつ住宅の例

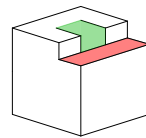


例 交差点の家  
3ヶ所に外部ヴォイドがある例である。  
1はかき取られている外部空間。  
2と3は食い込んでいる外部空間。

#### 外部ヴォイドとして扱わない例

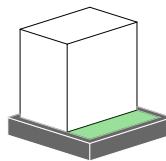


カーポートとして利用されているスペースは、建物のヴォリューム外であるので、外部ヴォイドとして扱わない。

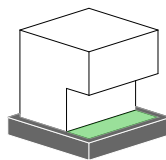


赤い部分は外部ヴォイドであるが、機能を持たず、アクセスできないので外部ヴォイドとして扱わない。

#### 用途同一の場合(両者ともにテラス)



建物のヴォリューム外なので機能を持っているが外部ヴォイドとして扱わない。



建物のヴォリューム内に納まっている機能を持っているので外部ヴォイドとして扱う。

#### 4. 研究（調査）結果

下記の表は分析作品名、設計者名、前述の分析方法による分析結果をまとめたものである。

表. 分類結果

資料名	設計者名	外部ヴォイド	壁面形状	開口部構成
1. 城南町の家	高砂正弘	a	3	v
2. CASA O	櫻井義夫	c	1	i
3. ONE BOXの家-II	貴志雅樹環境企画室	b	2	v
4. ONE BOXの家-I	貴志雅樹環境企画室	c	2	iii
5. 三山の住宅	難信宏+難啓子	c	1	i
6. ちっちゃな家	杉浦伝宗	b	1	iii
7. 北橋の家	坂本昭	d	1	iv
8. 大島の住宅	佐藤光彦	a	1	v
9. 江波の家	宮森洋一郎	b	5	v
10. 聖天下の家	峰岸隆+寺地洋之	d	3	iv
11. 工場街の家	野口修+D.A.T.	e	4	v
12. 駒込曙町の家	富永謙	b	5	v
13. 小石川邸	飯田善彦	b	4	v
14. 要町の家	富田和義+大草弘美	a	5	ii
15. PARETE十条	船津基司	a	1	iv
16. 壺中の家	板屋リョウ	c	1	ii
17. 鷹合の家	WIZ ARCHITECTS	d	2	iv
18. 夙川の家	竹原義二	c	5	v
19. SSH-99	澤野真一	b	4	iv
20. KUSハウス	石田敏明	b	5	v
21. 白金の家	宮崎浩	a	4	i
22. 5.4/Y	橋本直明	a	4	iv
23. 仲池上の家	内海智行	e	5	i
24. FUKUKAWA HOUSE	細谷功+スタジオ4	d	1	i
25. 旗の台の家	吉田香代子+吉田郁夫	a	3	ii
26. 千石の住宅	佐藤光彦	a	1	iii
27. TO	設計組織ADH	b	1	iv
28. 紫野の家	長坂大	b	5	v
29. 千早の家	前田光一	a	4	iv
30. 代沢M邸	松永英伸	b	5	iv
31. たすきの家	大江一夫	b	4	iii
32. TOKYO トーキョー	吉松秀樹+アーキプロ	e	1	v
33. Beaver House	米田明	a	1	i
34. 鶴の木の家	田井幹夫	a	1	v
35. N邸	大堀伸	b	1	i
36. テツノマチヤ	花田佳明+山隈直人	b	5	ii
37. OGINO HOUSE	細谷功+スタジオ4	a	1	ii
38. 千川スクリーンの家	田井幹夫	c	5	iii
39. 廉庵	松葉力+テレデザイン	b	5	iii
40. ナチュラルウェッジ	遠藤政樹+池田昌弘	a	2	v
41. 箱の家 58	難波和彦+界工作舎	b	2	iv
42. 用賀の家	K+S7アーキテクト	b	3	i
43. 江東の住宅	佐藤光彦	e	1	iii
44. 個別充居	藤江通昌	c	4	iv
45. ガエ・ハウス	アトリエ・ワン	e	5	i
46. TAK	石田敏明	a	5	v
47. ヨコハマハウス	安立悦子	e	1	iv
48. 0   8	有馬裕之	e	3	ii
49. H邸	西久保毅人	a	5	v
50. 積層の家	大谷弘明	c	5	iv
51. K-container	安田博道	a	1	iv
52. 門前仲町の住宅	佐藤光彦	e	5	iii
53. HP	米田明	e	5	iv
54. 九段の家	阪根宏彦計画設計事務所	c	1	iv
55. 美草園の長屋	小野曉彦建築設計事務所	d	2	iv

#### 5. 考察

本研究は、「外部ヴォイド」の有／無、その分類からスタートしている。ほとんどの住宅（全資料55作品中46作品）が外部ヴォイドを持っていることがわかる。外部ヴォイドは採光に関して大きな影響力をもつ。四方が囲まれた状況の中で、ただトップライトを設けただけでそこから採光する住宅が全く見当たらなかった。その手法の一つとして外部ヴォイドを利用するものが多かったということである。採光という単一の目的にとどまらず、通風、視線の遮断、室内空間に視覚的な広がりを持たせるものなど、複数の機能を持ち合わせていることが読み取れる。

これは、敷地が小さいので自ずと平面的に小さくなってしまい、空間として表現すると必然的に狭くなってしまいうため、狭さを解消させるアイデアであるということが出来るし、斜線制限によって必然的に生まれたものであるともいえる。また、敷地が小さいので一つの場所に複数の機能を持たせなければならないともいえる。いずれにせよ、外部ヴォイドが住宅をより良くしていることに違いはない。本研究では採光にしか焦点をあてていないが、外部ヴォイドが持っている可能性は採光だけではない。

その一つとして、緩衝帯としての役割というのが挙げられる。外部ヴォイドを緩衝帯して人の視線を遮断し、光りを採り込み、プライバシーの問題と採光の問題を一挙に解決している。

また、前面道路に対する開口部の構成は、部分的に開口部が集中しているものが最も多く、全層にわたって開口部のあるものが次に多い。両者にいえることは上部に位置しているものが多いということである。建物全体から見て高い位置に集中している場合もあるし、一層分だけをみてもその位置は上部に位置しているものが多く、積極的に開口部を設けるがプライバシーを考慮していることがうかがえる。全面道路に直接開口部を設けるのではなく、緩衝帯を持てる条件ならば緩衝帯を持ち、持てない条件ならば、緩衝帯に代わるものを常に用意しているのである。

#### 6. まとめ

都市型小住宅の開口部の採り方は、意図的に試みる場合と、法規によって必然的に試みることを余儀なくされる場合とが考えられる。この二つの要素をうまく解釈することが都市型小住宅の設計では重要である。外部空間—緩衝帯—内部空間という関係をどのように作るかが、気持ちのよい採光を可能にし、豊かな生活空間を生み出すことにつながっている。開口部の取り方に気を配りデザインすることは住宅を設計する際、軽視してはならないと再認識した。

#### 【参考文献及び引用文献】

##### 参考文献

- ・新建築 住宅特集1997年1月号～2004年12月号
- ・坂本一成：室配列における組み合わせとつながり方、日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）2002年8月
- ・建築文化2001年12月号 小住宅の現在形
- ・住宅という場所で TOTO出版
- ・家族を容れるハコ 家族を越えるハコ 平凡社

##### 引用文献

- ・JA 43 2001 Autumn Small 小さいこと
- ・世界百科事典 第二版 平凡社